多文化共生研究所　主催

第3回 ランチセミナー

「ラオスにいったい何があるというのでしょう？」

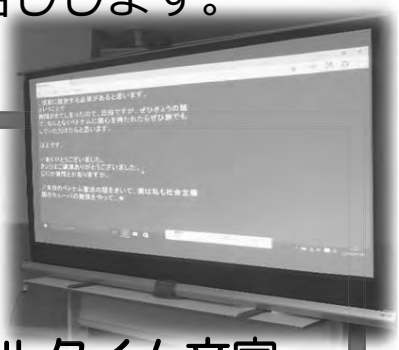
矢野順子（国際関係学科准教授）

ラオスはインドシナ半島の内陸国で国境をタイ、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、中国と接しています。近年、ASEAN地域への注目が高まる一方、村上春樹の『ラオスにいったい何があるというんですか』という本のタイトルにあらわれているように、日本人にとってラオスはいまだ「未知の国」というイメージが強いのではないでしょうか。今回は「ラオスにいったい何があるのか」、ラオスの魅力についてお話しします。

お弁当を食べながら、参加してみませんか？

日時

２０１７年1月１２日（木）
１２：０５～１２：４５
（昼食をご持参ください）
会場：　H棟 ００３教室



聴覚障害をお持ちの方のための、遠隔型リアルタイム文字配信を提供します。
お気軽にご参加ください。

システム協力：(株)アイセック・福井

愛知県立大学多文化共生研究所ランチセミナー（第 3 回）
ラオスにいったい何があるというのでしょう？

愛知県立大学外国語学部国際関係学科
矢野順子

2015 年、村上春樹が『ラオスにいったい何があるというんですか？』というタイトルの紀行文集を出版した。このタイトルの由来は、村上がラオスの古都ルアンパバーンを訪れる際、トランジットで立ち寄ったハノイでベトナム人に言われた言葉であるという。「ベトナムにはない何がラオスにあるというのか」という意味合いが言外に感じられたそうである（村上 2015, 151）。

筆者は 1998 年に研究をはじめてから、幾度となくラオスを訪問しているが、タイ人やベトナム人などラオスの近隣諸国の人々から同様の質問をよく受けた。インドシナ半島の内陸国で人口も少なく、後発開発途上国であるラオスは彼らにとって魅力的とは思えない国であるのかもしれない。日本においても、ラオスの知名度は決して高いとはいえず、近年注目を集めつつある ASEAN 諸国の中でも「未知の国」といったイメージが強いのではないだろうか。

しかし一方で、ニューヨーク・タイムズをはじめとする欧米のメディアでラオスは、「世界のおすすめ観光地」としてとりあげられる機会が増えている。年間の観光客数も 2005 年の 109 万 5315 人から 2015 年には 468 万 4429 人に達するなど、着実に増加してきている[1]。

今回のランチセミナーではそのようなラオスにいったい何があるのか？一般事情、近隣諸国との関係やフランス植民地支配の歴史、言語状況などを説明した後、ラオス南部のコーンの滝、結婚式や村祭りについて写真を使って紹介した。「何があるのか」という問いに対して、世界遺産や寺院名などを挙げることはできる。しかし、ラオスの魅力はそのような有形のものではないようにも思われる。今回のセミナーをきっかけに一人でもラオスに足を運ぶ人が増え、それぞれがこの問いの答えを見つけていただければ幸いである。

参考文献

村上春樹. 2015. 『ラオスにいったい何があるというんですか？』文藝春秋

---

1 http://www.mekongtourism.org/wp-content/uploads/Laos-2015-Statistics-Report-on-Tourism-in-English-Version.pdf（2017 年 2 月 16 日アクセス）